

# 国立国語研究所学術情報リポジトリ

〈客員教員の研究紹介〉 萬葉集5・904  
のアザリ「未詳」の意味と語源について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2015-10-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: ヴォヴィン, アレキサンダー, VOVIN, Alexander メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15084/00000710">https://doi.org/10.15084/00000710</a>

## 萬葉集 5・904 のアザリ「未詳」の意味と語源について

On the Meaning and Origins of the *hapax legomenon* a<sup>n</sup>zari in Man'yōshū 5.904

アレキサンダー・ヴォヴィン (Alexander VOVIN)

萬葉集には意味が不明の言葉が多いことは現在に伝わる最古の注釈である仙覚の『萬葉集註釋』でよく知られている。この論文でそれら全てを取り扱うのは勿論無理だが、萬葉集の有名な挽歌である 5・904 に於けるアザリ「未詳」についての拙見を述べたいと思う。その言葉の意味と語源を論じる前に、まず萬葉集の本文・仮名の書き下し・仮名・漢字交じり文と過去の注釈を検証する。本文・仮名の書き下しは最新の萬葉集の第五巻の編集・英語翻訳・英語注釈 (Vovin 2011) による。

### 萬葉集 5・904

#### 本文

(1) 世人之 (2) 貴慕 (3) 七種之 (4) 寶毛我波 (5) 何為 (6) 和我中能 (7) 産礼出有 (8) 白玉之 (9) 吾子古日者 (10) 明星之 (11) 開朝者 (12) 敷多倍乃 (13) 登許能邊佐良受 (14) 立礼杼毛 (15) 居礼杼毛 (16) 登母尔戲礼 (17) 夕星乃 (18) 由布弊尔奈礼婆 (19) 伊射祢余登 (20) 手乎多豆佐波里 (21) 父母毛 (22) 表者奈佐我利 (23) 三枝之 (24) 中尔乎祢牟登 (25) 愛久 (26) 志我可多良倍婆 (27) 何時可毛 (28) 比等々奈理伊弓天 (29) 安志家口毛 (30) 与家久母見武登 (31) 大船乃 (32) 於毛比多能無尔 (33) 於毛波奴尔 (34) 横風乃 (35) 尔布敷可尔 (36) 覆來礼婆 (37) 世武須便乃 (38) 多杼伎乎之良尔 (39) 志路多倍乃 (40) 多須吉乎可氣 (41) 麻蘇鏡 (42) 弓尔登利毛知弓 (43) 天神 (44) 阿布藝許比乃美 (45) 地祇 (46) 布之弓額拜 (47) 可加良受毛 (48) 可賀利毛 (49) 神乃末尔麻尔等 (50) 立阿射里 (51) 我例乞能米登 (52) 須臾毛 (53) 余家久波奈之尔 (54) 漸々 (55) 可多知都久保里 (56) 朝々 (57) 伊布許登夜美 (58) 靈剋 (59) 伊乃知多延奴礼 (60) 立乎杼利 (61) 足須里佐家婢 (62) 伏仰 (63) 武祢宇知奈氣吉 (64) 手尔持流 (65) 安我古登婆之都 (66) 世間之道

#### 仮名の書き下し<sup>1</sup>

(1) よの<sub>2</sub>ひ<sub>1</sub>と<sub>2</sub>の<sub>2</sub> (2) たふと<sub>1</sub>びねがふ (3) ななくさの<sub>2</sub> (4) たからも<sub>1</sub>われは (5) なにせむに (6) わがなかの<sub>2</sub> (7) うまれいでたる (8) しらたまの<sub>2</sub> (9) あがこ<sub>1</sub>ふるひ<sub>1</sub>は (10) あかほしの<sub>2</sub> (11) あくるあしたは (12) しき<sub>1</sub>たへ<sub>2</sub>の<sub>2</sub> (13) と<sub>2</sub>こ<sub>2</sub>の<sub>2</sub>へ<sub>1</sub>さらず (14) たてれど<sub>2</sub>も<sub>1</sub> (15) をれど<sub>2</sub>も<sub>1</sub> (16) と<sub>2</sub>も<sub>2</sub>にたはぶれ (17) ゆふつづの<sub>2</sub> (18)

<sup>1</sup> 上代中央日本語の母音の甲乙区別は下付きの<sub>1</sub>と<sub>2</sub>で表す。

ゆふへ<sub>1</sub>になれば (19) いぎねよ<sub>2</sub>と<sub>2</sub> (20) てをたづさはり (21) ちははも<sub>1</sub> (22) うへ<sub>2</sub>はなさがり (23) さき<sub>1</sub>くさの<sub>2</sub> (24) なかにをねむと<sub>2</sub> (25) うつくしく (26) しがかたらへ<sub>2</sub>ば (27) いつしかも<sub>1</sub> (28) ひ<sub>1</sub>と<sub>2</sub>と<sub>2</sub>なりいでて (29) あしけ<sub>1</sub>くも<sub>1</sub> (30) よ<sub>2</sub>け<sub>1</sub>くも<sub>1</sub>み<sub>1</sub>むと<sub>2</sub> (31) おほふねの<sub>2</sub> (32) おも<sub>1</sub>ひ<sub>1</sub>たの<sub>2</sub>むに (33) おも<sub>1</sub>はぬに (34) よ<sub>2</sub>こ<sub>2</sub>しまかぜの<sub>2</sub> (35) にふぶかに (36) おほひき<sub>1</sub>ぬれば (37) せむすべ<sub>1</sub>の<sub>2</sub> (38) たど<sub>2</sub>き<sub>1</sub>をしらに (39) しろ<sub>1</sub>たへ<sub>2</sub>の<sub>2</sub> (40) たすき<sub>1</sub>をかけ<sub>2</sub> (41) まそ<sub>1</sub>かがみ<sub>1</sub> (42) てにと<sub>2</sub>りも<sub>1</sub>ちて (43) あまつかみ<sub>2</sub> (44) あふぎ<sub>1</sub>こ<sub>2</sub>ひ<sub>1</sub>の<sub>2</sub>み<sub>1</sub> (45) くにつかみ<sub>2</sub> (46) ふしてぬかつき<sub>1</sub> (47) かからずも<sub>1</sub> (48) かかりも<sub>1</sub> (49) かみ<sub>2</sub>の<sub>2</sub>まにまにと<sub>2</sub> (50) たちあざり (51) あれこ<sub>2</sub>ひ<sub>1</sub>の<sub>2</sub>め<sub>2</sub>ど<sub>2</sub> (52) しましくも<sub>1</sub> (53) よ<sub>2</sub>け<sub>1</sub>くはなしに (54) やくやくに (55) かたちつくほり (56) あさなさな (57) いふこ<sub>2</sub>と<sub>2</sub>やみ<sub>1</sub> (58) たまき<sub>1</sub>はる (59) いの<sub>2</sub>ちたえ<sub>2</sub>ぬれ (60) たちをど<sub>2</sub>り (61) あしすりさけ<sub>1</sub>び<sub>1</sub> (62) ふしあふぎ<sub>1</sub> (63) むねうちなげ<sub>2</sub>き<sub>1</sub> (64) てにも<sub>2</sub>てる (65) あがこ<sub>1</sub>と<sub>2</sub>ばしつ (66) よ<sub>2</sub>の<sub>2</sub>なかの<sub>2</sub>み<sub>1</sub>ち

### 仮名・漢字交じり文

(1) 世の人の (2) 貴<sup>たふと</sup>慕<sup>ねが</sup>ふ (3) 七<sup>ななくさ</sup>種<sup>の</sup> (4) 寶<sup>な</sup>も我<sup>に</sup>は (5) 何<sup>なに</sup>爲<sup>せ</sup>むに (6) わが中の (7) 産れ出でたる (8) 白玉<sup>の</sup> (9) 吾<sup>おほ</sup>が子<sup>こ</sup>古<sup>ふる</sup>日は (10) 明星<sup>あかほし</sup>の (11) 開<sup>あ</sup>く<sup>あ</sup>る朝<sup>あした</sup>は (12) 敷<sup>し</sup>多<sup>き</sup>倍<sup>へ</sup>の (13) 床<sup>の</sup>邊<sup>へ</sup>去<sup>ゆ</sup>ら<sup>づ</sup>ず (14) 立<sup>た</sup>て<sup>た</sup>れ<sup>れ</sup>ども (15) 居<sup>い</sup>れ<sup>れ</sup>ども (16) 共<sup>た</sup>に<sup>た</sup>戯<sup>は</sup>れ (17) 夕<sup>た</sup>星<sup>は</sup>の (18) 夕<sup>ゆ</sup>べ<sup>ふ</sup>に成<sup>な</sup>れば (19) いぎ寝<sup>ね</sup>よと (20) 手<sup>た</sup>を<sup>づ</sup>携<sup>さ</sup>は<sup>り</sup> (21) 父<sup>ちち</sup>母<sup>はは</sup>も (22) 表<sup>う</sup>は<sup>な</sup>勿<sup>な</sup>下<sup>げ</sup>がり (23) 三<sup>さん</sup>枝<sup>し</sup>の (24) 中<sup>な</sup>に<sup>な</sup>を<sup>を</sup>寝<sup>ね</sup>むと (25) 愛<sup>う</sup>く (26) 其<sup>その</sup>が語<sup>こと</sup>らへば (27) 何<sup>いつ</sup>時<sup>とき</sup>しかも (28) 人<sup>ひと</sup>と成<sup>な</sup>り出<sup>い</sup>でて (29) 悪<sup>あ</sup>し<sup>し</sup>け<sup>く</sup>も (30) 善<sup>よ</sup>け<sup>く</sup>も見<sup>み</sup>むと (31) 大<sup>おほ</sup>船<sup>ふね</sup>の (32) 思<sup>おも</sup>ひ憑<sup>たの</sup>むに (33) 思<sup>おも</sup>はぬに (34) 横<sup>よこ</sup>風<sup>しまかぜ</sup>の (35) にふぶかに (36) 覆<sup>おほ</sup>ひ來<sup>き</sup>れば (37) 爲<sup>せ</sup>む術<sup>すべ</sup>の (38) 方<sup>た</sup>便<sup>た</sup>を<sup>た</sup>知<sup>し</sup>らに (39) 白<sup>しろ</sup>栲<sup>たへ</sup>の (40) 手<sup>た</sup>襖<sup>すき</sup>を掛<sup>か</sup>け (41) まそ鏡 (42) 手<sup>て</sup>に取<sup>と</sup>り持<sup>も</sup>ちて (43) 天<sup>あま</sup>つ神 (44) 仰<sup>あ</sup>ぎ乞<sup>こ</sup>ひ禱<sup>の</sup>み (45) 地<sup>く</sup>つ祇<sup>かみ</sup> (46) 伏<sup>ふ</sup>して額<sup>ぬかづき</sup>拜 (47) かからずも (48) かかりも (49) 神<sup>かみ</sup>のまにまにと (50) 立<sup>た</sup>ちアザリ (51) 我<sup>われ</sup>れ乞<sup>こ</sup>ひ禱<sup>の</sup>めど (52) 須<sup>す</sup>臈<sup>ろ</sup>も (53) 快<sup>た</sup>くは無<sup>な</sup>しに (54) 漸<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>に (55) 容<sup>か</sup>貌<sup>たち</sup>つくほり (56) 朝<sup>あ</sup>さ<sup>あ</sup>な<sup>な</sup> (57) 言<sup>い</sup>ふこと止<sup>と</sup>み (58) 命<sup>たま</sup>絶<sup>きは</sup>えぬれ (60) 立<sup>た</sup>ち踊<sup>おど</sup>り (61) 足<sup>あ</sup>す<sup>す</sup>摩<sup>ま</sup>り叫<sup>こ</sup>び (62) 伏<sup>ふ</sup>仰<sup>あ</sup> (63) 胸<sup>むね</sup>うち嘆<sup>なげ</sup>き (64) 手<sup>て</sup>に持<sup>も</sup>てる (65) 吾<sup>われ</sup>が子<sup>こ</sup>飛<sup>と</sup>ばしつ (66) 世<sup>よ</sup>間<sup>なか</sup>の道

萬葉集 5・904 の同挽歌、第五十行に現れるアザリの意味は未詳である。残念ながら、この動詞は同歌以外、萬葉集のどの歌にもその他の上代文献にも出てこない。『時代別国語大辞典・上代編』には「あざる（動四）未詳。とり乱し騒ぐ意か」という記述があり、そして、「考」では平安時代以後に現れたアザル（下二段）「ふざける」・「くつろぐ」<sup>2</sup> と関係がある可能性に言及している（澤瀉 1967: 19）。萬葉集 5・904 のアザリと平安時代の下二段動詞であるアザルとの関係の仮説は『萬葉集古義』にさかのぼる（鹿持 1912: 154）。『萬葉集全注』でも同じ意見が採用されている（井村 1984: 255-256）。『萬葉集索引』も同様で、アザリの

<sup>2</sup> 最初に『土佐日記』に出る。

定義として「戯」という漢字が使われている(古典索引刊行会 2003: 409)。しかし、息子を失った憶良がふざけるわけがない。多分、くつろぐことさえもできなかったにちがいない。上記以外の定義としては、萬葉集の色々な注釈を見ると、『萬葉代匠記』に「立阿射里は、俗に、心いられて、いかにせむとさわぐを、あせるといふ、これなるべし」という注釈がある(契沖 1974: 158-159)。『萬葉集新考』は「阿射里は阿何里あがりの誤字にあらざるか」という誤字の仮説を立てている(井上 1928: 995)。しかし、何れの写本にも「阿射里」が見られるので、誤字の可能性は低い。また、「射」と「何」は楷書でも草書でも大分違い、混乱しにくい漢字であろうと思われる。そして、文献学的な立場から見れば、誤字の説明は信頼性が非常に低く、誤字の解釈はそれ以外には何の説明もできない場合に使われるべきだと思う。後ほど、この仮説が通用しない理由をもう一つあげる。『萬葉集全釋』には「アザリは騒ぎ乱れる意」とある(鴻巣 1939: 130)。『萬葉集全注釈』もまた「アザリは騒ぎ乱れること」という同じ意見を示す(武田 1957: 579)。『萬葉集大成』も同じ説明である(正宗 1953: 249)。『萬葉集注釋』(澤瀉 1960: 311)も「日本古典文学全集」の『萬葉集』(小島・木下・佐竹 1972: 118)も『萬葉集全訳注』(中西 1978: 424)も全て同様である。その他の解釈を見ると、「日本古典文学大系」の『萬葉集』には「うろろう動きまわり」という説明がある(高木・五味・大野 1959: 120)。『萬葉集釋注』は「立ちあざり 躰をしきりに動かすさま。「あざり」は「足去り」か。孤語」としている(伊藤 1996: 266)。「新潮日本古典集成」の『萬葉集』の注釈は「立ちあざり 取り乱し騒ぐさま。「あざり」は「足去り」か」であるから、『萬葉集釋注』とほとんど変わらないが、口語訳として「居ても立っても」が使われている(青木・井手・伊藤・清水・橋本 1978: 107-108)。私の意見では、下で詳しく述べるが、この口語訳が正しいと思う。「新日本古典文学大系」の『萬葉集』は「あざりの語、「未詳」。口語訳では「取り乱して」と、仮に言う。」とある(佐竹・山田・工藤・大谷・山崎 1999: 526)。『萬葉集評釋』は「アザリは乱れる意で、取り乱しにあたる」と説明している(窪田 1966: 144)。『萬葉集私注』は「立ち騒ぐ」または「足去り」の何れかとし(土屋 1976: 199)、『萬葉集全歌講義』は「うろろう動き回る」か「取り乱し騒ぐ」の意であろうとしている(阿蘇 2007: 258)。

以上の色々な説を見ると、ただ一つ共通の特徴がある。というのは、何れの説にも証拠が全く提示されていないということである。従って、拙著の萬葉集第五巻の編集・英語翻訳・英語注釈にはあざりを「未詳」とした(Vovin 2011: 170)。しかし、この場で考えを改めたいと思う。

萬葉集 5・904 を全体的に見ると、同挽歌は比較的特別な構造を持っていると言える。その構造とは対立的構造である。以下に対立的な構造を成している語彙と表現をあげる。番号は行の番号を示す。

- (1) 世の人の (2) 貴たふとび慕ねがふ ↔ (4) 我は (5) 何なに爲せむ  
 (9) 子 ↔ (28) 人<sup>3</sup>  
 (10) 明あかほし星 ↔ (17) 夕ゆふつづ星

<sup>3</sup> 「人」はここでは「大人」の意味を持っている。

- (11) 朝<sup>あした</sup> ↔ (18) 夕べ  
 (14) 立てれども ↔ (15) 居れども  
 (16) 共に戯<sup>たはぶ</sup>れ ↔ (19) いざ寝よ  
 (21) 父母も (22) 表<sup>うへ</sup>は勿<sup>な</sup>下がり ↔ (23) 三<sup>さき</sup>枝<sup>くさ</sup>の (24) 中にを寝む  
 (29) 悪<sup>あ</sup>しけくも ↔ (30) 善<sup>よ</sup>けくも  
 (32) 思<sup>たの</sup>ひ憑<sup>たの</sup>む ↔ (37) 爲<sup>せ</sup>む術<sup>すべ</sup>の (38) 方便<sup>たどき</sup>を知らに  
 (43) 天<sup>あま</sup>つ神 ↔ (45) 地<sup>く</sup>つ祇<sup>かみ</sup>  
 (44) 仰<sup>あふ</sup>ぎ乞<sup>の</sup>ひ禱<sup>の</sup>み ↔ (46) 伏<sup>ぬか</sup>して額<sup>かづき</sup>拜  
 (47) かからずも ↔ (48) かかりも  
 (60) 立ち ↔ 踊り  
 (61) 足<sup>あし</sup>摩<sup>す</sup>り ↔ 叫<sup>こ</sup>び<sup>び</sup><sup>4</sup>  
 (62) 伏<sup>ふし</sup> ↔ 仰<sup>あふぎ</sup>

上に提示した対立的な事象は最後の三例に見られるように、異なる行にだけでなく、同じ行にも現れる。それゆえに、(50) 行の立ちアザリの立ちとアザリも対立的な事象を表す可能性が高いと考えられる。このように考えると、アザリは「立ち」の対立語となる。「立つ」の対立語として、想像できるのは「うつぶせる」、「跳ぶ」、「走る」、「座る」などだろう。だから、上に引用した井上説は正しくないと思う。(50) 立ちアザリ (51) 我れ乞ひ禱めど…という文脈を見ると、走りながら、あるいは跳びながら祈りをするのは不自然だから、「走る」あるいは「跳ぶ」も適切な解釈ではないだろう。しかし、祈りの活動は立ってもうつぶしても座っても可能である。(50) 立ちアザリの中に「立つ」行為はもうあるから、排除しなければならない。残る上代中央語のフス「うつぶせる」もヲル「座る」もこの挽歌中に現れる。特にフス「うつぶせる」は祈りの場面を表す(46) 行の「伏して額拜」に出ている。ヲル「座る」は祈りの場面を表す場面に出ていることから、(50) 立ちアザリのアザリは「座る」を示すのではないかと思う。したがって、(50) 立ちアザリ (51) 我れ乞ひ禱めど…は「立ちながら座りながら、我は願い祈っても」になる。

この分析が正しいとすれば、アザリはおそらく上代中央日本語の言葉ではないだろう。上代中央日本語のアザリの音声的な形は [a<sup>h</sup>zari] であった。中世朝鮮語にはそれによく似ている anc- (𪎭-)「座る」という動詞がある。なぜ萬葉集に朝鮮語借用語が現れるかという疑問があるかもしれないが、その理由は多くある。

まず、朝鮮語借用語の例は萬葉集やその他の上代文献に少なくない。拙著の *Koreo-Japonica* でもその借用語について詳しく述べた (Vovin 2007, Vovin 2010: 92–94) ので、ここでは二、三例だけあげるにとどめる。まず上代中央日本語には二重語が多く見られる。二重語とは全く同じ意味の言葉が二つあるわけだが、その一つは上代中央日本語だけに見られるもので、もう一方は日琉諸言語に幅広く分布している。また、前者は朝鮮語借用語で、後者は日琉系

<sup>4</sup> アシスリとサケビは同じように深い悲しみに関連しているが、アシスリは人間の声または言葉を用いない活動で、サケビは逆である。

の言葉であるという特徴がある。たとえば、上代中央日本語の *kasö* 「父」は百済語借用語で<sup>5</sup>、上代中央日本語以外の日琉諸言語には姿を現さない。一方、上代中央日本語の *titi* 「父」は日琉諸言語に幅広く分布しており、朝鮮語には全く無関係である。同じように、上代中央日本語の *mane-* 「多」<sup>6</sup> と *sa* 「矢」<sup>7</sup> は朝鮮語借用語で、上代中央日本語の *opo* 「多」と *ya* 「矢」は日琉系の言葉である。

第二に、この挽歌の作者である山上憶良は天智天皇の時代に百済の亡命渡来人として来た憶仁の息子であった（中西 1985: 280）。最近、山上憶良を栗田氏の支族とする仮説も出されたが（森 2008）、色々な理由から中西説が正しいと思われる。言語学と文献学に関わる理由を下で述べる。

第三に、この挽歌にはもう一つの朝鮮語借用語がある。すなわち、第二十三行の三枝の *sakí* (三) である。この *sakí* (三) という言葉は間違いなく朝鮮祖語の \**sekih* (> 中世朝鮮語 :*seyh*) にさかのぼる。勿論、アザリと比べ、三枝は孤語 (*hapax legomenon*) ではなく、萬葉集の 5・904 と 10・1895 以外にも、その他の上代中央日本語の文献にも見られる（澤瀉 1967: 323）。

第四に、山上憶良が書いた萬葉集 5・897 の前にある詩一首并序の序にある「申臂之頃千代且空」の「申臂之頃」、すなわち「肘を申す瞬間」という表現は朝鮮仏教伝統に関係ある可能性も以前指摘した（Vovin 2011: 155-157）。

ただし、アザリが中世朝鮮語の *ànc-* (앉-) 「座る」という動詞に関係があるとする、当然、*[a<sup>n</sup>zari]* の *[a<sup>n</sup>z]* の後の *[ari]* を説明しなければならない。*[ari]* は上代中央日本語の継続アスペクト形の *-êr-* + 連用形 *-i* の結合であると思う。*[ar-i]* が *[êr-i]* (< *-i-ar-i*) ではなく、*[ar-i]* として現れる理由は、*[a<sup>n</sup>z]* が朝鮮語の動詞であるため、上代中央日本語の連用形 *-i* の代わりに、上代朝鮮語の連用形 *-a* を持っていたので、*[a<sup>n</sup>za-r-i]* となり、*[ar-i]* はその省略であると考えられる。

ちなみに、私の解釈が正しければ、*[a<sup>n</sup>zari]* という形は朝鮮語の音韻の歴史にも非常に大切になる。すなわち、中世朝鮮語の NC 子音群の N を挿入音として説明する伝統的な定説（李 1964, Ramsey 1978: 54-56, Lee & Ramsey 2011: 151-152）に、疑問を投げかけることになる。特に、李基文（1964）と Ramsey（1978: 54-56）は中世朝鮮語の *ànc-* (앉-) 「座る」に n (ㄴ) 挿入が起こったと論じていた。しかし、以前も拙著（Vovin 2010: 20-21）に示したように、*ànc-* (앉-) 「座る」の中の n (ㄴ) 挿入のための中世朝鮮語の内的な証拠は十分とは言えない。そして、*[a<sup>n</sup>zari]* という形が上代朝鮮語の借用語であることが正しければ、上代朝鮮語の *ànc-* (앉-) 「座る」の中に鼻音があったという結論を避けることはできないだろう。

<sup>5</sup> 百済語 *kasö* 「父」。

<sup>6</sup> 中世朝鮮語 :*manh-* (: ㅁ-) 「多い」。

<sup>7</sup> 中世朝鮮語 *sál* (: ㅅ) 「矢」。

## ●参考文献●

- 青木生子・井手至・伊藤博・清水克彦・橋本四朗(校注)(1978)『萬葉集 二』(新潮日本古典集成). 東京:新潮社.
- 阿蘇瑞枝(2007)『萬葉集全歌講義 三』東京:笠間書院.
- 井村哲夫(1984)『萬葉集全注 卷第五』東京:有斐閣.
- 井上通泰(1928)『萬葉集新考 第二』東京:国民図書.
- 伊藤博(1996)『萬葉集釋注 三』東京:集英社.
- 鹿持雅澄(1912 (1854))『萬葉集古義 第三』東京:国書刊行会.
- 契沖(1974 (1690))『萬葉代匠記 三』(久松潜一(監修)「契沖全集」第3卷). 東京:岩波書店.
- 小島憲之・木下正俊・佐竹昭広(1972)『萬葉集』(日本古典文学全集). 東京:小学館.
- 鴻巣盛廣(1939)『萬葉集全釋 第二冊』東京:廣文堂書店.
- 古典索引刊行会(編)(2003)『萬葉集索引』東京:塙書房.
- 窪田空穂(1966)『萬葉集評釋 Ⅲ』(「窪田空穂全集」第15卷). 東京:角川書店.
- 李基文(1964)「動詞語幹「 $\text{ㄹ}$ -,  $\text{ㄹ}$ -」의 史的考察」陶南趙潤濟博士回甲紀念事業會(編)『陶南趙潤濟博士回甲紀念論文集』223-250, ソウル:新雅社.
- Lee, Kimun and S. Robert Ramsey(2011) *A history of the Korean language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 正宗敦夫(編)(1953)『萬葉集大成 12 本文編一』. 東京:平凡社.
- 森公章(2008)『遣唐使と古代日本の対外政策』東京:吉川弘文館.
- 中西進(1978)『万葉集 全訳注原文付 (一)』東京:講談社.
- 中西進(編)(1985)『万葉集事典』東京:講談社.
- 澤瀉久孝(1960)『万葉集注釋 卷第五』東京:中央公論社.
- 澤瀉久孝(代表)(1967)『時代別国語大辞典・上代編』東京:三省堂.
- Ramsey, S. Robert(1978) *Accent and morphology in Korean dialects*. Kwukihak chongse 9. Seoul: Thap chwul-phansa.
- 佐竹昭広・山田英雄・工藤力男・大谷雅夫・山崎福之(1999)『萬葉集 一』(新日本古典文学大系). 東京:岩波書店.
- 高木市之助・五味智英・大野晋(1959)『萬葉集 二』(日本古典文学大系 5). 東京:岩波書店.
- 武田祐吉(1957)『萬葉集全注釈』増訂版. 東京:角川書店.
- 土屋文明(1976)『萬葉集私注 (三)』東京:筑摩書房.
- Vovin, Alexander(2007) Once again on doublets in western old Japanese. In: Bjarke Frellesvig, Masayoshi Shibatani, and Charles Smith (eds.) *Current issues in the history and structure of Japanese*, 351-373. Tokyo: Kuroshio Publishers.
- Vovin, Alexander(2010) *Koreo-Japonica: A re-evaluation of a common genetic origin*. Honolulu: University of Hawai'i Press.
- Vovin, Alexander(2011) *Man'yōshū, book 5: A new English translation containing the original text, kana transliteration, romanization, glossing and commentary*. Folkestone: Global Oriental.

【要旨】 この論文では萬葉集「5・904」に現れる孤語であるアザリの意味と起源を明らかにする。「5・904」の長歌のテキスト分析の結果として、アザリには「座る」という意味があったことが分かる。勿論、日琉諸言語にはその動詞がないから、借用語にちがいない。そのアザリは上代朝鮮語の借用語だという結論に至る。

**Abstract:** I discuss the meaning and origins of the hapax legomenon *a'zari* that occurs in MYS 5.904. As a result of textual analysis it becomes apparent that *a'zari* means 'to sit.' Since there is no such a verb in the Japonic languages, I argue that it represents a borrowing from Old Korean.

### アレキサンダー・ヴォヴィン (Alexander Vovin)

ハワイ大学マノア本校・東洋言語・文学部教授。Ph. D. (日本語学) (サンクトペテルブルグ大学・サンクトペテルブルグ東洋学研究所)。サンクトペテルブルグ東洋学研究所研究員, ミシガン大学講師, マイアミ大学講師, ハワイ大学講師・助教授を経て, 2003年8月より現職。

2001年～2002年及び2008年, 国際日本文化研究センター客員助教授。2008年～2009年, ポフム大学客員教授。2012年5月～8月, 国立国語研究所言語対照研究系客員教授。

主な著書・論文: *A reconstruction of proto-Ainu* (Brill, 1993), *A reference grammar of classical Japanese prose* (RoutledgeCurzon, 2003), *A descriptive and comparative grammar of western old Japanese, part 1 and 2* (Global Oriental, 2005, 2009), *Koreo-Japonica: A re-evaluation of a common genetic origin* (University of Hawai'i Press, 2010), *Man'yōshū: A new English translation containing the original text, kana transliteration, romanization, glossing and commentary, books 15, 5, and 14* (Global Oriental/Brill, 2009, 2011, 2012)。

社会活動: Global Oriental/Brill の書籍シリーズ「アジアの諸言語」編集長, *Diachronica, Cahiers de Linguistique Asie Orientale, Studia Orientalia Slovaca, Migracijske Teme, Language Documentation and Preservation, Türk Dilleri Araştırmaları* 各誌の編集委員。